

そして一本桜(葛城三千子著)が陶説に紹介されました

# 陶説

日本陶磁協会発行



70周年記念茶会 茶陶名品展/出羽桜美術館

760

七月号

昭和三十一年三月九日  
平成二十八年七月一日発行(毎月一回一日発行) 通巻第七六〇号

そして一本桜  
―後世に残したい桜たち

葛城三千子著

右文書院刊

定価二七〇〇円+税

連載「奥高麗をめぐる謎」など『陶説』へも寄稿いただいている葛城さんが、「日本の料亭紀行」につづき本書を上梓された。

桜といえばソメイヨシノが全国的に有名だが、実は幕末につくり出されたもので、古くより歌に詠まれ、絵画や文様に見られる桜は、山桜や彼岸桜、枝垂れ桜であり、それらの古木は近年目立って衰弱してきているという。葛城さんはせめて記録に残そうと、三十年前より全国各地の桜の古木を訪ねて取材撮影してきた。

戦火で黒焦げになりながらも見事復活した沖縄本部町の樹齢二百年のカンヒザクラに始ま

り、北は北海道虻田郡の羊蹄山を遠景に行む「牧場の桜」まで、四十七都道府県すべてを網羅した、六百余本の桜を収録している。それでもまだ取材の一部であり、今回は代表的なものを取り上げている。

最高齢は、樹齢二千年を誇る山梨北杜・実相寺境内のエドヒガンザクラ「山高神代桜」。近年瀕死の状態に陥ったが樹木医により再び花を咲かせるようになったとのこと。開花時期には花見客が列をなすという。一方、人里離れた秘境の古木も多く、せっかく苦勞して訪れたのにまだ蕾だったこともあったそうだ。本文では、それぞれの古木にまつわる歴史や伝承、見守り続けてきた人々のエピソードが織り込まれ興味は尽きることがない。さらに各県ごとにお奨めの宿と食事処も紹介されており、本書を頼りにまずは身近なところから訪ねてみたい。(編集部)

## 茨城県立笠間陶芸大学校開校記念展 現代陶芸・案内

とき 7月16日(土)～9月11日(日)

ところ 茨城県陶芸美術館 TEL 0296(70)0011

内容 戦後の陶芸界を牽引した作家、新進の若手作家、海外の著名作家による作品を一堂に集め、現代陶芸の魅力をかき取りやすく案内する。1章「伝統の器の成熟」、2章「オブジェの出現と進化」、3章「平成10年代以降の様式」、特別展示「海外の動向」「茶碗の展開」の構成で約135点出品。  
※76頁も併せてご覧ください。

## セラミックス・ジャパン

―陶磁器でたどる日本のモダン―

とき 7月23日(土)～8月28日(日)

ところ 石川県立歴史博物館 TEL 076(262)3236

内容 「クールジャパン」の原点、日本近代陶磁器作りの歩みを、明治から戦前までの作品やデザイン関係資料約150点で紹介し、知られざる「日本のモダンデザイン」の系譜をたどる。  
※79頁も併せてご覧ください。

〔巡回先〕 岐阜県現代陶芸美術館(7月10日)、兵庫陶芸美術館(9月10日～11月27日)、渋谷区立松濤美術館(12月13日～1月29日)